

夷隅郡大多喜の虚空蔵菩薩坐像、馬頭観音菩薩立像の見学

——学生とともに学ぶフィールドワーク——

* 金丸 和子

はじめに

日本伝統文化学科の演習科目は、夏休みを中心にフィールドワークを実施し、教室内だけでは修得できない体験と実地調査を盛り込んでいる。私が担当する演習（日本美術史Ⅱ）では、平成二十三年度は、五月に東京国立博物館で「ブッダ」展を、夏に東京国立博物館で開催された「空海と密教美術」展と同時開催の特集展示「運慶周辺の仏像」を見学した。まず前期は、仏像が生れるまでを授業形式で学び、「ブッダ」展を見学し、実物を見ながら再確認をした。その後、密教美術を中心として、学生が調査し、報告をする形式で演習を進めた。それまでほとんど実際に見る経験がなかった学生には、「空海と密教美術」展で実見することによる収穫は予想以上に大きかった。

今年度はとくに十一月二十日（日）、定例の夏のフィールドワークの他に、千葉県夷隅郡大多喜町の千葉県立中央博物館大多喜城分館で開催中だった「中房総の古社寺」という企画展の見学を企画し、大多喜町にある仏像を拝観することにした。この小稿では、見学会によっ

て、直接仏像を守り伝えてきた人々から、机上とは異なるものの見方を学べたことを報告する。

一、見学に行くまで

夏の見学会を経て、後期は時代を追って仏像について調べ、文献史料と写真（図版）資料によって考察を重ねた。学生は各自担当箇所を調べ、史料と図版を集めて授業時間内に報告をする。その過程で、写真だけではわかりにくいところがあって、もどかしい思いをすることがあった。また一方で、同時代の房総地域の仏像はどうだったのかという疑問も出てきた。実見することの価値を知った学生の中には、こんなところにも古い仏像があると、千葉のガイドブックなどを見て報告する者もあった。

折しも十月二十八日から十二月四日まで、千葉県立中央博物館大多喜城分館で、企画展「中房総の古社寺」を開催中であつた。そこで、この企画展を見学し、周辺の仏像を拝観することにして、全員の都合

* Kazuko KANAMARU 日本伝統文化学科 (Department of Japanese Tradition and Culture) 非常勤講師

を開き日程を十一月二十日（日）と決めた。周辺の徒歩圏の寺院を検討し、紺屋地区の観音寺の馬頭観音立像と大山祇神社所蔵の虚空蔵菩薩坐像を同じ日に拝観できるのではないかと考えた。両像ともに単独像として祀られる例は多くなく、房総地域の特色を知ることができるかも知れない重要な事例である。

まず、学生とともに見学の行程を考えた。一日で廻れるかどうかを知るため、地図により位置を確認。何とか三ヶ所を廻ることができそうだと判断した。次にJR千葉駅を起点としていすみ鉄道大多喜駅までの鉄道の時刻を調べて決定し、全員に周知した。

仏像は非公開であるとわかり、学生と相談の後、大多喜町にお伺いし、お願いをしてみることにした。本来は学生がするべき拝観の依頼だが、今回はまだ不慣れだったことから私が行った。大多喜町の図書館にご勤務の文化財担当渡鍋氏にお世話になり、行程に関するアドバイスもいただいた。大多喜町の皆さまの御好意とご親切は非常に有り難く、そのお気持は学生にも伝わったことと思う。

前日は悪天候だったので、心配のお電話をいただいた。当日も大多喜駅に泉水地区の方にお出迎えいただき、大多喜町の方々には大変親切にしていたいただいた。

二、千葉県立中央博物館大多喜城分館

いすみ鉄道大多喜駅に集合し、大多喜城の本丸跡に建てられた千葉県立中央博物館大多喜城分館を目指した。近世の大多喜城は「高台にあつて濠に囲まれている」といわれ、博物館への道の途上で現在も濠跡を見ることができる。建物も城郭を模して造られ、大多喜町のシン



千葉県立中央博物館大多喜城分館

ボルの存在である。常設展示も城下町大多喜らしく、「房総の城と城下町」をテーマにしている。

今回は「中房総の古社寺」という企画展を中心に見学した。

「中房総」とは、房総半島のほぼ中央部に位置する自

治体が連携して、観光の推進などをするための区分だそうで、この企画展では、市原、長生、夷隅地域の古社寺を扱っている。⁽²⁾ 房総半島の中央を東京湾から太平洋まで横断する地域である。市原市には上総国分寺跡（現医王山清浄院国分寺）があり、仏教的にはそのあたりが古代における中心だった。

房総地域の仏像については、概ね中央と変わらないとされるが、房総地域に特色ある作例も少なくない。⁽³⁾ 例えば、四臂十一面観音像の作例が多い、善光寺式阿弥陀が集中的に造像された、など今回の企画展

で確認できた特徴もある。

ポスターにも使われたいすみ市清水寺の奥の院本尊木造十一面観音立像は、四臂である。これは、胎藏界曼荼羅中の蘇悉地院の十一面観音の形である。蘇悉地院の十一面観音は坐像であり、清水寺像は立像であるが、四臂という珍しい形が共通している。房総地域では他にも千倉の小松寺の坐像（銅造鍍金）、一宮の観明寺の立像（木造・弘長三年・一二六二・蓮上作）などがある。胎藏界曼荼羅に依拠する密教的な図像といえる。いすみ市清水寺は、慈覚大師を開祖とすると伝えられる。千葉県内には慈覚大師ゆかりの寺院が五十三ヶ寺あり、全国的に見ても天台密教が盛んであったことが窺える⁴。おそらく鎌倉時代に入ってもその傾向が続き、四臂十一面観音像造像はその一環と考えられる。清水寺像が素地仕上げで檀像風なところは、密教的な伝統を踏襲しているのかも知れない。寄木造りで玉眼入り、変化に富んだ写実的な衣文表現、引締った理知的な表情など鎌倉時代彫刻の特徴を呈している。今回は展示されていないが、一宮観明寺像も同じようなつくりであり、よく似ている。近い関係にあると思われる、「中房総」という文化圏を想定できるかもしれない。

市原市の銅造阿弥陀如来立像は、背面の銘文から文永十一年（一二七四）造立の善光寺式阿弥陀如来像であるとわかる。ガラスケースの後ろにも回れ、背面が見えるように展示されていて、銘文も見ることができた。鎌倉時代の金銅仏によくあるように体部に直接銘文を刻んである。銘文によると、文永十一年、「鎌倉新大仏住侶寛□」が「浄光上人」の菩提を弔うために造った善光寺如来であるという。浄光上人は鎌倉大仏の勧進人とされている⁵。鎌倉大仏関連資料としても貴重な仏像である。右手は壊れてしまっているが、垂下する

左手は刀印を結び通肩の衣を着る典型的な善光寺式阿弥陀である。一光三尊形式の大光背と両脇侍は失われている。波打つ髪際、張った頬ゆつたりとした体軀、一部鋭角に変化をつけた衣文など、建長六年（一二五四）銘の東京国立博物館蔵の善光寺式阿弥陀如来像（栃木県那須伝来）と似ている。大きさも中尊四十七センチ前後と近い。

善光寺式阿弥陀三尊像は、信濃善光寺の本尊と同じ靈驗を持つ模刻像が十三世紀後半ごろから全国で造像され、信仰されるようになったものである。いすみ市行元寺の銅造阿弥陀如来立像も通肩に衣を着て、左手を刀印にする典型的な善光寺式阿弥陀如来像である。こちらは、肉髻が丸く高く、手が小さく、多少全体が細身にできているところから、鎌倉円覚寺の文永八年（一二七一）の善光寺式阿弥陀三尊像と近く、香取の修徳院、正応三年（一二九〇）銘善光寺式阿弥陀如来像とも近く、制作年代も十三世紀後半に推定できる。市原の像とは作者の系列が異なるのだろうか。しかしどちらも、鎌倉時代後期に房総においても、善光寺式阿弥陀如来像への信仰が盛んであったことが窺える材料となる。

「中房総」と括弧することの意義を強く見出すことはできないが、房総地域の特色を理解する材料となる仏像が地域ごとにまとめて、わかりやすく展示されていた。

三、大多喜町泉水地区大山祇神社所蔵木造虚空蔵菩薩坐像

午後からは、いよいよ仏像の拝観である。まず、大多喜城の北に位置する大山祇神社所蔵の虚空蔵菩薩坐像を訪ねる。現在は大山祇神社の所有であるが、かつては泉水寺という大寺院が当地にあり、そこに

祀られていたとされ、現在は、泉水寺の境内にあったという六所神社の隣の堂宇に祀られている。六所神社の本殿は、室町時代後期の建立である。実際には、泉水地区の氏子の皆さまが虚空蔵菩薩像を管理なさっている。当日は、氏子の皆さまのお世話で拝観することができた。本像について事前に調べたところ、あまり多くの情報は得られなかった。まず、一般向けの千葉県ホームページには、

「大山祇神社 所在地 大多喜町泉水

本造虚空蔵菩薩坐像（県指定有形文化財）」

この像は高さ一五二センチメートルの寄木造りである。虚空蔵菩薩とは、一切の知恵と功德を包蔵すること虚空の如くであるところから名づけられたものである。

彫法は極めて古く、雄大崇高の相をあらわし、全体の印象から平安朝後期の作と推定される。宝冠、瑳瑤、右手などは後に補ったものであり、昭和四六年には全面的な解体修理が行われた。大山祇神社境内にこの堂があるのは、神仏習合の歴史を物語るものである。」

と、記されている。

また、『千葉県の文化財』では、

「像高一・五二メートル、カヤ材の寄木造の木造である。虚空蔵菩薩は、知恵と功德を無限に備え念ずるとすばらしく頭が良くなるといわれ奈良・平安時代よりかなり多くの像が作られ、手に宝珠をもつ半跏像が古いとされているが、平安時代以降鎌倉時代になると一般的な坐像、立像に変わってくる。

右手に剣をもっているのが普通であるが、この像は右手の指を開いたま、になっている。あるいは後世のはぎつけの可能性もある。

製作年代は、顔、左右の両肩をおおう衣、両膝の衣のひだなどから

みると室町時代以降と思われる。

大山祇神社は、神仏習合の修験道と関係があり、神社に仏像があるゆえんと思われる。

著色、はぎつけ等全体的に痛みがすすんでいたが、昭和五〇年に修理が行われ、旧に復した。」

とあり、相当の違いがある。

昭和六十一年に書かれた千葉県教育委員会と夷隅郡教育委員会による堂宇前の説明板では、ほぼ『千葉県の文化財』と同様な記述だが、本像を大山祇神社の本地仏であったといわれている、とする。

記述が異なる修理の年代については、氏子の方々に伺ったが、「昔、美大の学生さんたちが直してくれた」としか分からず、今回は正確なところが不明なままである。今後の課題とし、修理箇所なども明らかにしたい。

制作年代は、変化をつけた写実的な衣文の表現から平安時代後期とは考えられない。肩にかかる衣とされる部分は、背面までよく観察してもつながりがはっきりしなかった。他の例から見ても、本来両肩にかかる天衣であるはずなのだが、天衣の先が見えない。修理の際に肩にかかる部分だけ活かした可能性も考えられる。豊満ながら引き締まっている理知的な表情は、鎌倉後期よりさらに下がる時代が想定できそうである。

右手は後補だが、肘、手首の角度から現状のような与願印である可能性が高く、求聞持系の虚空蔵と考えられる。『虚空蔵菩薩能満諸願最勝心陀羅尼求聞持法』による虚空蔵菩薩求聞持法は、虚空蔵菩薩を本尊として、一定の作法に則って一日一万遍、百日、虚空蔵菩薩の真言を唱える修法である。満願の暁には明星が口中から入り、いったん



木造虚空蔵菩薩坐像 (大山祇神社)

見聞覚知したものは決して忘れないという求聞持の知恵が授かるという。この本尊である虚空蔵菩薩は、宝花上に坐し、五仏冠を戴き、左手に宝珠をのせた蓮華枝、右手は与願印である⁽⁹⁾。

中世以降求聞持系の虚空蔵菩薩の画像は多く残されている。彫像も少なくない。そもそも求聞持法が深山幽谷で修することが求められていたので(経典では、空閑静処、浄室、塔廟、山頂、樹下)、山岳修験と結びつき、発展したとみなされる。奥美濃地域にとくに鎌倉から室町時代の剣を持つ虚空蔵菩薩像が多いことが指摘されている⁽¹⁰⁾。白山信仰との関わりも想像できる。

房総地域では、大山祇神社以外にも虚空蔵菩薩像が富津市岩坂地区に木造坐像、君津市蔵玉の円盛院に木造立像がある。富津市の坐像は、像高六九・五センチの一木造り素地仕上げの像である。一部にノミの

跡を残す鉋彫仕上げが特徴である。宝珠を捧げる蓮華は花だけで茎を伴わないこと、条帛は着けず、通肩の衣に偏衫を着けることが大山祇神社の像とは異なる。求聞持系ではない福德を求める修法の本尊と見られている⁽¹¹⁾。君津円盛院の立像は、像高八七・四センチ、寄木造りで玉眼嵌入、檀色仕上げにして頭髮は群青、眉、髭などは墨、唇は朱を塗る。胎内文書から応仁三年(一四六九)造立と見られているが、鎌倉時代後期の作と見る人もいる⁽¹²⁾。その他にも、いすみ市般若寺に立像、君津市岩田寺に立像があり、南北朝時代ごろの制作とされる⁽¹³⁾。

求聞持法は空海が修したことで名高いが、鎌倉仏教の栄西や日蓮も修したと伝えられる。これらの像は日蓮とは直接関わりはないが、岩田寺の像は、清澄寺が里見義康により打ち壊された際、脱出した院主が岩田寺に移座したものと伝えられる⁽¹⁴⁾。房総の清澄山で日蓮は求聞持法を修したのである。現在も清澄山には虚空蔵菩薩像数体が伝わっている。房総地域にも虚空蔵信仰が定着していったとみなされよう。

虚空蔵菩薩は、南北朝時代から室町時代には十三仏信仰の最終仏とされた。初七日から三十三回忌までの十三回の供養の本尊を定めた考え方で、その仏菩薩が浄土への導者となる。民間信仰の中に根強く広がって行くことになり、虚空蔵菩薩がよく知られるようになる。

中世以降民間信仰の中で、虚空蔵信仰は発展し、たとえば十三参りなどは、虚空蔵菩薩の縁日が十三日であり、十三回の追善供養の最終仏であるという十三という数から、十三歳になった子供が三月十三日に虚空蔵菩薩に知恵と福德という虚空蔵菩薩の利益をもらうために参詣する。今でも盛んに行われる地域もある行事である⁽¹⁵⁾。大多喜の虚空蔵菩薩にも十三参りをするという、氏子の方のお話も伺った。

氏子の方のお話で興味深かったのは、鰻の禁忌である。鰻は虚空蔵菩薩の使令と言われ、虚空蔵菩薩を信仰する地域では鰻を食べないという習慣がある⁽¹⁶⁾。氏子の方に尋ねてみると、大多喜泉水地区では鰻を食べないという。十三日の縁日や放生会、願を掛けて叶った時には、裏手にある放生池（灌漑用水として使用）に鰻を放つそう。信仰が生き続けているのだ。寺そのものは失われたが、篤志家によって現在の虚空蔵堂が建てられ、仏像が修理された。かつては縁日には旅芸人の一座も来るなどたいそう賑わったそうである。地区の人々の心により、現在まで守られてきたのである。

四、大多喜町紺屋地区木造馬頭観音立像

泉水を後に次の目的地紺屋地区に移動する。ご親切にも泉水地区の方が車で送ると言って下さったので、お言葉に甘えることにした。徒歩三十分ほどを予定していたが、十分足らずで到着した。「三箇蔵山」という扁額を付けた小堂と観音寺事務所のある建物の前の広場で、紺屋区長はじめ世話人の方々が待っていて下さった。堂の裏手は、大多喜自動車教習所である⁽¹⁷⁾。

泉水の虚空蔵菩薩像と同様に、千葉県案内を引用する。千葉県ホームページ⁽¹⁸⁾には、

「観音寺 所在地 大多喜町紺屋八四

木造馬頭観世音菩薩立像（県指定有形文化財）

馬頭観世音菩薩は、頭上に馬頭をいただき、魔障や悪心などを馬口のように食いつくして衆生を救済するところからその名がある。

この像は、高さ八十九センチメートル、桧の一本造りである。三面六

臂に造られ、技法も入念で一流の仏師の作と思われる。

尊容、ひだ、全体の調子などからして鎌倉時代の作と推定される。六臂のうち欠けるところもあり、宝冠、瑳瑳および台座、光背は後補である。

なお、ビシュヌ神の化身の一つともいわれ、馬頭金剛明王は異名である。」

とある。

『千葉県の文化財』⁽¹⁹⁾には、

「像高八九センチ、サクラ材の一木造である。馬頭観音には、一面二臂、三面二臂、三面六臂、三面八臂など、さまざまあるが、この像は三面六臂の立像で、右の垂下した一臂を欠いている。

本像は、全体に、おだやかな造りで、膝前の二段にかかる天衣や裳のひだも静かな動きで、やや迫力に欠けるが藤原様式を受けた鎌倉時代後半の製作と推定される。宝冠、胸飾、長くさがる瑳瑳、持物、台座はすべて後補である。

馬頭観音の古例は全国的にみても少なく、京都浄瑠璃寺、福岡観世音寺のものが良く知られているが、本県では最古のものと考えられている。」

とあり、虚空蔵坐像の場合と比較すると両者に大きな相違はない。木がヒノキかサクラかと分かれるが、保存修理が行われた平成六年より後の「房総の神と仏」展の図録⁽²⁰⁾では、サクラと記されているので、そちらに従いたい。『千葉県の文化財』では右の垂下した一臂を欠くところがあるが、その後、平成六年の修理時に補われた。

扉を開けて待つて下さっていたので、すぐに堂内に入ると様々な奉納品、供物が捧げられ、現在も人々から篤い信仰が寄せられていると



木造馬頭観音立像（観音寺）

わかる。厨子に入っているので詳細な観察は難しいが、頭部が小さく、すらりとした姿に見え、体軀だけ見ると奈良時代の大安寺の木造馬頭観音立像のようにとお腹の辺りが丸みを帯びている。もちろん大安寺像と比べると肉付けも穏やかで腰の張りも小さく、大きく異なることは明白なのだが、体軀の丸さが印象的なので大安寺像を髣髴とするところがある。

制作年代については、鎌倉時代とみる場合が多いのだが、「房総の神と仏」展の図録では平安時代後期としている。間近に見ても、なで肩でゆったりとした体軀、流れるように彫られた浅めの衣文表現などに、平安時代の特徴を見ることが出来る。一木造りで内割りをしてはいという木の持ち味を活かそうとした構造は古様だが、表現としては穏やかな和様を呈している。鎌倉時代の馬頭観音像の多くが、例えば福井中山寺の馬頭観音坐像のように、現実的な忿怒の相で表わされる

のと比べ、紺屋地区の像は穏やかな瞋怒の表情につくられている。平安時代後期ごろの制作と見てよいのではないかと思う。

馬頭観音は、一面、三面、四面のもの、手の数は二臂、四臂、八臂が図像として伝わる。頭上に馬頭を戴き、忿怒相。中央手は馬口印を結び、宝棒、蓮華、法輪、念珠、鉞斧などをもつ。坐像、立像ともにある。馬が濁水を飲み尽し、雑草を食い尽すように諸々の魔障を滅する²⁾という。観音の中では、性格的に激しく強く、特殊な形である。

三面六臂の像の典拠はないが、石川豊財院の立像、京都大報恩寺の六観音中の立像など作例は少なくない。紺屋地区の像は三面六臂で、三目。豊財院の像とはゆったりとした体軀や浅い衣文の表現に共通するところがある。豊財院像は、各面ともに二目で、内割りがあるなど必ずしも似ているとは言えないが、鎌倉時代の大報恩寺の像より近い感覚がある。

古代には馬頭観音像は造像例が少なく、平安時代には六観音のひとつとしての信仰が中心だった。鎌倉時代からは単独像も増えてくる。江戸時代になると非常に盛んに信仰されるようになる。庶民の馬への信仰、家畜への思い、農耕の守り神として見られるようになったからと言われる。その意味では盛んな民間信仰の対象となった虚空蔵菩薩と同様であり、仏教の尊格が庶民の間に生活に密着した親しみのある日常的な信仰の対象となり、盛んに造像され、信仰を集めたのである。

紺屋地区観音寺の馬頭観音には、『上総国大滝馬頭観音霊験記』が伝わっている。人々の篤い信仰が伺えるので、ここに概略を紹介する。現在流布しているコピー本は、平成元年に国立公文書館内閣文庫所蔵本をもとに、大多喜町文化財審議会委員が書写し、註とふり仮名を付

したものである。有り難くも観音寺のお世話役の方からコピー本をいただき、拝読したのである。

原本は、観音寺中興の法印寛能が享保十四年（一七二九）に記した『馬頭観音畧縁起』と『畧靈験記』の二部構成である。

『畧縁起』には、鎌倉將軍頼経が大多喜城再興の際三棟の宝蔵を建てようとしたところ、馬頭観音像が現出したので、そこに一堂を建て安置した。三箇蔵山と言う名称はここに由来する。寺は元禄十六年（一七〇三）の大地震で大破した。その復興は困難を極め、そのためとうとう本所回向院での出開帳をした。最後に紺紙金泥大般若経六百卷書写の願の詳細を記す。現在観音寺にある享保本の紺紙金泥大般若経六百卷は、この時のものである。毎年、の転説に用いたであろうが、大変美しく傷みもなくよく保存されている。

『畧靈験記』は、当時の馬頭観音への信仰の形が顕れている。

一、房州天津村にて六という者の靈願の事

元禄十二年（一六九九）房州長狹郡天津村（現在の鴨川市天津）宝泉寺で開帳をした時のこと。十七歳の六という漁師の息子が、四年前から病気になる、手を尽したが治らず、下半身に力がなくなり、歩くこともできなくなった。父親が亡くなり母親ひとりに養われていた。本尊の前に母親に背負われてやって来て、七日間昼夜を通しての断食の行をしていたところ、六日目の午後二時頃立つことができた。

二、子を持たない女が願を懸けて子を持てた利勝の事

長狹郡横渚村（現在の鴨川市横渚）観音寺で開帳の時、三十歳ぐらいの女性が二人、子を授かりたく、昼夜を問わず熱心に拝んでいたの、当本尊を一心に礼拝恭敬するよう教えたところ、二人とも子を授かった。添えられている絵では、礼拝する馬頭観音像は立像だが、馬

頭観音が影向する姿は坐った姿で表わされている。

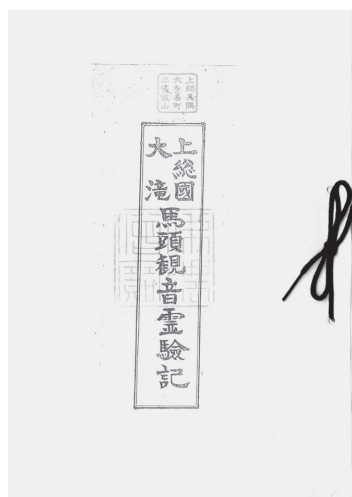
三、疫病を煩い目、耳が不自由となり手も足も動かなくなった女の靈

験の事

府中近在海老敷村（現在の南房総市海老敷）の清右衛門の二十二歳の娘寅が近くの村に四年前に嫁入りし、夫婦睦まじく繁昌していたが、疫病に罹ってしまった。必死の看病にも拘わらず、病は癒えたが目も耳も不自由となり、立ち居歩行も自由にできず、言葉もままならなくなってしまった。離縁され里に帰った。船形村（現在の館山市船形）大福寺で開帳の折り、本尊の前に背負われて来たが、拝むこともものを言うことも、真言を唱えることもできず、ただひたすら本尊に向かい観念していた。このまま信心していれば諸願が成就すると教えられた。次の開帳の地、岩井村（現在の南房総市岩井）蓮台寺では、病難のありさまを語ることができ、立ち居歩行も自由になった。次の上堀村（現在の南房総市上堀）勸修院では本快し、次の平九里村（現在の南房総市富山平九里）への道中の途中まで見送った。

四、死んだ馬が蘇生した利勝の事

上堀村勸修院で開帳の時に府中村（現在の南房総市府中）の安田五郎兵衛と言う人が参詣に来て話したところによると、近くの本折村（現在の南房総市府中に隣接する本織か）の信仰篤い五右エ門に本尊の信仰を勧められたという。五右エ門の馬が病を得て苦しんだ末死んでしまった。いつも折っている三ヶ蔵山馬頭観音を念じたところ、馬が起き上がった。五右エ門は感謝しても感謝しきれないので、歩ける間は毎年礼参することにした。その馬はその後よく働いたので、もったいなく思い、府中村の角右エ門に送った。角右エ門も同じように思い、亀原村の徳右衛門に送った。馬は蘇生後十年生きた。五右エ門、五郎



『馬頭観音霊験記』コピー本

兵衛は馬頭大士の現身だと亀原村まで行き、ねんごろに回向したという。この場面の影向する馬頭観音は立ち姿である。五、篤い信仰の徳によつて馬の横難をのがれた事

享保五年（一七二〇）市原郡から馬を牽いて参詣に来たものが語った話。家来がこの馬を牽いて馬草刈りに出掛けた。自分は別に木綿畑で働いていたところ、居眠りをしている間にご本尊が虚空に現れ、馬が横難にあったがいつも信心をしている篤信を思い急難を救つたと語った。家に帰り家来を問いただしたところ、災

難を隠していたが、夢の話をして更に尋ねると、帰り道に馬が深さ六七丈ある谷底に落ちた。驚いて険しい谷へようやく下りてみると馬は無事だった。これもひとえに馬頭大士のご加護である。

『霊験記』では他にもあるが、と前置きして代表例として具体的に以上の五例を挙げて、霊験を説明している。人の病氣平癒、子宝に恵まれる、安産、障碍を除く、またとくに馬などの家畜の病氣や災難を問い除き、あるいは馬の毛色の要求にまで、ありとあらゆる難、ありとあらゆる願にに応じてくれるといい、利勝を得るために信心を勧めている。

この『縁起、霊験記』を読んで感じたことは、『縁起』部分で、馬頭観音像が出現したのは鎌倉時代將軍頼經（在位一二二六～一二四四）が大多喜の城を再興し終った時の出来事として語られていることである。大多喜城の歴史は、十六世紀以前については詳らかではないので、十三世紀の大多喜城の再興も明らかでない。しかし、馬頭観音像がそのころ出現したというのは、この地で制作したのではなく、他所でつくられ運ばれて来た、あるいは客仏だったことを示唆するのも知れない。

『縁起』自体、伝説的な部分が多く事実とはいえないが、ここに記されている情報では、馬頭観音像は鎌倉時代中期から当地に存在していたことになる。制作年代の検討との関わりは難問である。

『霊験記』を読むと、周辺の寺院で馬頭観音像の御開帳をよくしている。霊験譚を聞いているのは『霊験記』執筆である法印寛能である。元禄十六年（一七〇三）の地震で伽藍が大破した後、宝永戊子（一七〇八）の秋から周辺の地を巡り復興の勧進に努めた。それでようやく修復半ばに至ったのである。享保十四年（一七二九）には本所

回向院での御開帳、大般若經の書写等を行い、復興を成就しようとした。そのための『靈驗記』である。ここに記された靈驗譚は、宝永五年（一七〇六）からの出開帳の機会にそれぞれの場で直接話を聞き集められた話である。馬頭観音の利益を明らかにして、勧進の成果をあげようとしたのである。そして、馬頭観音に江戸時代の人々がどのような利益を期待していたかが伝わる、興味深い資料となった。

おわりに

見学を終え、紺屋地区の世話人の方に大多喜駅まで送っていただき、帰途についた。

研究という点ではこの見学はスタート地点に過ぎないが、学生にとっては、机上ではわからない実物に触れて知ることができる実地調査の重要性を認識できたのではないかと思う。今回だけではないが、立体的なものを写真で理解するのは難しく、細かい凹凸や質感などは実際に目で見ないことにはわからない部分が多い。

地域特性、雰囲気を感じることができたのも収穫である。展覧会では伝わらない、仏像が置かれている場を体験できた。

また、今回の場合はとくに、生活に密着した信仰の対象としての虚空蔵菩薩と馬頭観音を拝観した。文化財として守り伝えるだけではなく、地域の方々の仏像への愛情が感じられた。

そして何より、大多喜の皆さまの温かい心に触れたのは嬉しく、感謝したい。学生にとっても美術史だけではなく大きな学びの機会となった。

註

- (1) 慶長十四年（一五九〇）大多喜を訪れたスペイン人ドン・ロドリゲスが『日本見聞録』に記した。
- (2) 平成二十三年度企画展図録『中房総の古社寺』（平成二十三年、千葉県立中央博物館 大多喜城分館）
- (3) 濱名徳純「中世房総の仏教彫刻」（『千葉県の歴史 通史編 中世』（平成十九年・千葉県）拙稿「正覚院の仏像をめぐって」（『村田一男先生古稀記念論集 八千代の歴史・民俗・文化』二〇一〇）
- (4) 「円仁ゆかりの寺社」（『慈覚大師円仁とその名宝』展図録、二〇〇七・栃木県立博物館）
- (5) 「房総の神と仏」展図録（平成十一年、千葉市美術館）
- (6) 『千葉県の歴史散歩』（二〇〇六年、山川出版社）
- (7) <http://www.pref.chiba.lg.jp/> 県政情報・夷隅事務所 平成二十二年十二月十六日更新
- (8) 千葉県文化財保護協会、平成二年
- (9) 『大正蔵』第二十卷一四四五
- (10) 泉武夫『日本の美術 三八〇 虚空蔵菩薩像』二九〇三二ページ（一九九八年、至文堂）
- (11) 泉武夫『日本の美術 三八〇』七三〇七三四ページ
- (12) 福徳法の本尊である虚空蔵菩薩像は、左手に如意宝珠、右手は与願印とすることが多い。泉武夫『日本の美術 三八〇』四三二ページ
- (13) 註3に同じ
- (14) 註3に同じ
- (15) 佐野賢治『虚空蔵菩薩信仰の研究 日本の仏教受容と仏教民俗学』（平成八年、吉川弘文館）
- (16) 註15に同じ
- (17) 大多喜自動車教習所のあるところは、もとは観音寺の寺域であった。明治以降寺盛が衰え、境内の一部を競馬場にしたいという。競馬場に馬頭観音を祀る例はよくあるが、馬頭観音のところに競馬場を造る逆のケースは珍しい。競馬場の場所に現在自動車学校がある。
- (18) 註7に同じ
- (19) 註8に同じ
- (20) 註5に同じ
- (21) 井上一稔『日本の美術 三一二 如意輪観音像・馬頭観音像』五四〇五八ページ（一九九二年、至文堂）